

南半球便り（その3）：カウラ訪問

2021 年 2 月 24 日

（1）「カウラって、どこ？」

日本の知人に「カウラに行ってきた。」というと、大抵の方からは「どこ、それ？」という反応が返ってきます。日本における知名度からしたら致し方ないのかもしれませんが、カウラが日豪関係において果たしてきた重大な役割に鑑みると、残念でなりません。

カウラは、キャンベラから北方へ約 190 キロ、車で 2 時間強の場所にある人口約 1 万人の小さな町。なだらかな丘が波のように連なる美しい牧草地の中に位置する平和で静かなところ です。

（2）カウラ・ブレイクアウト

この小さな町が、日豪関係に携わる両国の関係者の間で語り継がれてきたのは、そこが近代史上最大の捕虜脱走事件と言われる「カウラ・ブレイクアウト」の舞台となったからです。今を遡ること 75 年余の 1944 年 8 月 5 日未明、カウラ捕虜収容所に収容されていた日本人捕虜の集団脱走事件が発生。脱走時の銃撃等で、日本人捕虜 234 名、豪州人衛兵 4 名が死亡、辛くも脱走した 300 余名の日本兵も翌週には捕えられ、成功した者はひとりもいなかったと伝えられています。

このあたりの事情については、いくつもの公刊本に書かれており、私も『カウラの突撃ラッパ―零戦パイロットはなぜ死んだか』、『鉄条網に掛かる毛布』などで読み学ぶにつけ、豪州に赴任したら間を置かずに必ず訪れたいとの気持ちが高まってきました。



カウラの収容所跡地

（３）感動

そこで、大使としての信任状捧呈前でしたが、２月１５日にカウラを訪れ、当時日豪双方において貴重な人命が失われたことに対し、深く頭を垂れ、心より哀悼の意を表してきました。何よりも強く感じ入ったのは、悲惨な過去にも拘わらず、ウエスト・カウラ市長をはじめとするカウラの関係者の方々の間に、日本に対する心温まる配慮と気遣いが溢れていたことでした。１９６４年にカウラ共同墓地の一角に「日本人戦没者之墓（日本人戦争墓地）」が開設され、大戦中に亡くなられた日本人戦争捕虜と民間人抑留者の遺骨が豪州全土から収容（５２４人埋葬。）されました。その日本人戦争墓地がカウラ市役所や関係者の方々の努力により、実に丁寧に綺麗に維持されており、日本人として深い感動を覚えました。



日本人戦争墓地への献花

加えて、近隣には、１９７８年に造園家の中島健氏が設計し、グリフィス理事長が率いる日本庭園文化センター財団が維持管理する回遊式日本庭園の「カウラ日本庭園」が凜とした佇まいを見せていました。おそらく南半球随一の美しい日本庭園であり、乾燥しがちな豪州にあっては稀有の水と緑の世界を実現していました。望郷と無念の思いを抱いたままに散華した英霊の魂が、日本を彷彿とさせるこの庭園で優しく癒やされているのではないかと想像を巡らせました。

年間４万人を超える豪州人が訪れる観光名所となっているとのことであり、カウラの捕虜収容所で発生した衝撃的な脱走事件と合わせて考えると、カウラが「日豪関係の精神的聖地」と呼ばれてきた理由が良く理解できる気がしました。

地元紙のインタビューでも、「ブレイク・アウト」で失われた貴重な生命の犠牲に対して哀悼の意を表明するとともに、日本人墓地等を整然と維持し続け、戦後の日本との友好関係の構築に腐心をされてきたカウラ市関係者の努力に深い敬意と感謝の念を表明した次第です。



日本庭園

（４）相互理解と相互信頼

1944 年 8 月 5 日の未明、南半球の厳冬の最中、ナイフ、フォーク、野球バット等だけを手にして機関銃を備えていた衛兵に対して決起した日本兵の心理は、長年豪州人の理解を越えたものとみなされてきました。今なお「狂信的」と表現されることもあります。無理がないのかもしれませんが。平和を享受している今の多くの日本人にとっても、想像しがたい面があるからです。

「生きて虜囚の辱めを受けず」との戦陣訓に囚われ、武人としての名誉を優先したとの解釈は当然あるでしょう。同時に、故郷を偲び、父母の安全を願い、妻や恋人や残される子供達への断ちがたい思いを抱えつつ、無理な蜂起に立ち上がった各人の苦悩と絶望がどれほど深いものであったか。日豪間の相互信頼が進んだ今だからこそ、理解が促進される部分もあるのではないかと感じました。

（５）安全保障の協力

かつて干戈を交え、カウラの悲劇を経験した日豪両国も、今や安全保障面での協力を強力に推し進める間柄となりました。豪州軍と自衛隊の間では共同演習、共同巡航がたびたび行われ、さらには昨年 11 月には、日、豪、印、米の 4 カ国で共同海上演習「マラバール」が行われるまでに至りました。

過去を忘れず、しかし、それを糧にして和解を達成し、協力を深化させてゆく。これこそが、カウラで失われた日豪双方の貴重な人命に報いる道であると思いながら、キャンベラへの帰途に着きました。8 月の慰霊祭、9 月の桜祭りの時期をはじめとして、カウラには事あるたびに足を運ぼうと思っています。

山上信吾